

ニッ山第3遺跡

ニッ山地区宅地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

序

農業を中心ありました田野町も、企業誘致・工業団地の整備充実、リゾート開発の推進により、飛躍的な発展を遂げつつあります。更に、宮崎市の近郊に位置し、道路・鉄道等の交通手段も整っていることから、とくに国道に面した各地で宅地開発が盛んに行われております。

しかし、近年のこれらの開発行為に伴い、多くの遺跡が消滅いたしました。
ここに報告いたします二ツ山第3遺跡は、二ツ山地区の宅地造成にあたって現状保存が不可能な部分を発掘調査により記録保存したものであります。

調査の結果、縄文時代早期の土器・石器と、中期の住居跡や土器・石器等の貴重な文化財が確認されました。

本書を学術資料のみならず、生涯教育の場で幅広く活用いただければ幸いと存じます。

平成4年3月31日

田野町教育委員会

教育長 鍋倉政信

例　　言

1 本書は、平成3年度に二ツ山地区の宅地開発に伴い実施した二ツ山第3遺跡の発掘調査結果を報告するものである。

2 調査は㈲東洋ホームより委託を受け、次の体制で行った。

　調査主体 田野町教育委員会

　調査組織 田野町教育委員会

　教　育　長　鍋倉 政信

　社会教育課長 北村 光雄

　社会教育係長 長友 啓泰（調整担当）

　同　主　査 長友 カツ子（事務担当）

　同　主　事 森田 浩史（調査担当）

　調査指導 宮崎県教育庁 文化課

3 発掘調査には作業員として町民の参加を得た。

室内における遺物整理・報告書作成作業には的場美佐子・富中優子らの補助を得た。

4 本書の執筆・編集は森田が担当した。

5 本書に用いた記号は、次のとおりである。

SK 土坑

SB 住居址

SP ピット（柱穴を含む）

SX その他

6 本書に用いた方位は磁北、標高は海拔絶対高である。

7 本書に用いた土色は、農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帳による。

本　文　目　次

第I章 序　説	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 二ツ山第3遺跡の位置と歴史的環境	1
第II章 調査の結果	3
第1節 調査の概要	3
第2節 遺構と遺物	3
第III章 ま　と　め	21

挿　図　目　次

第1図 町内遺跡分布図	2
第2図 遺跡周辺地形図	7
第3図 調査区概要図	8
第4図 SB-01実測図	9
第5図 SB-02・SK-07実測図	10
第6図 SB-03実測図	11
第7図 SX-06実測図	12
第8図 SX-08・09実測図	13
第9図 出土遺物実測図（遺構内出土の土器）	14
第10図 出土遺物実測図（遺構内出土の土器）	15
第11図 出土遺物実測図（包含層・確認トレンチ出土の土器）	16
第12図 出土遺物実測図（石器）	17
第13図 出土遺物実測図（石器）	18
第14図 出土遺物実測図（石器）	19
第15図 出土遺物実測図（石器）	20

写 真 図 版

- PL 1 A区全景 A区確認トレンチ全景 A区確認トレンチ遺物出土状況
- PL 2 A区遺構検出状況 SB-01・02・SK-07検出状況
- PL 3 SB-03・SK-05・SX-06検出状況
- PL 4 SX-08・09検出状況 B区全景 A区作業風景
- PL 5 出土遺物 (SB-01出土の土器等)
- PL 6 出土遺物 (SB-02出土の土器)
- PL 7 出土遺物 (SB-03・SK-04・05出土の土器と石器)
- PL 8 出土遺物 (SX-06・SK-07・SX-08出土の土器と石器)
- PL 9 出土遺物 (SX-09・中期包含層出土の土器)
- PL 10 出土遺物 (中期包含層出土の土器と石器)
- PL 11 出土遺物 (中期包含層出土の土器と石器)
- PL 12 出土遺物 (A区確認レンチ出土の土器と石器)
- PL 13 出土遺物 (石 Ⅲ)

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

近年、田野町ではリゾート開発や企業誘致をはじめ宅地開発も各地区で行われている。その中でも特に国道沿いで宮崎市に近い位置にある二ツ山地区周辺においては各種開発が盛んとなり、平成2年度は工場建設とともに二ツ山第2遺跡の発掘調査を実施した。

宅地開発については、以前から何件かの遺跡の有無についての照会をうけているが、平成3年1月25日に柳東洋ホームから照会をうけた宅地開発予定地について、同年2月4日から2月8日にかけて試掘調査を実施したところ、広範囲には至らなかったが特に台地の縁辺部において土器片等を確認した。これをもとに遺跡の保存と工事の対応について協議を行った結果、工事施工上地下構造に影響を与える部分を対象に発掘調査による記録保存の措置をとることになった。埋蔵文化財に関する協定書ならびに調査委託契約書を4月8日付けで締結した。発掘調査は雨天の多い中ではあったが、平成3年4月22日に着手し、6月17日に現地におけるすべての作業を終了した。

第2節 二ツ山第3遺跡の位置と歴史的環境

田野町は宮崎県中南部の宮崎市の西方約20kmの田野盆地を中心とし、東西・南北は約14kmあり、総面積は109.01km²に至る。田野盆地は南那珂山地の北西部にあたる、標高200m以下の台地上に、西南西に大きく入り込んだ地溝状の凹地である。

二ツ山地区はこの台地上にあり、国道269号線により南北に分断される。二ツ山第3遺跡はこの南側の清武川支流岡川左岸の河岸段丘上に位置する。前年度調査の二ツ山第1遺跡は、この南東にある。このほか、付近には合子ヶ谷第1・第2遺跡、二ツ山第2遺跡、下ノ原遺跡などがある。二ツ山第1遺跡からは縄文時代早期の集石遺構が約116基検出され、早期の吉田式系から塞／神式にわたる土器とこれに伴う石器が出土した。合子ヶ谷第1遺跡では平安時代のものとみられる布目痕土器・土師器が出土し、土坑が1基検出された。尚、二ツ山第3遺跡の周辺における縄文時代中期の遺跡の発見例は現在のところ無い。

〔参考文献〕

- 「合子ヶ谷第1遺跡」田野町文化財調査報告書 第8集 田野町教育委員会 1989
- 「田野町内遺跡詳細分布調査報告書」田野町文化財調査報告書 第10集 田野町教育委員会 1990
- 「二ツ山第1遺跡」田野町文化財調査報告書 第13集 田野町教育委員会 1992

第II章 調査の結果

第1節 調査の概要

二ツ山第3遺跡は、遺跡所在の有無についての照会を受けて、町教育委員会が実施した試掘調査により発見したものである。試掘調査は工事予定地内に10ヶ所のトレーニングを設定して行ったが、そのうち台地先端部にあたる南東隅の1か所についてのみ土器片が2点出土した。この結果から約500m²の調査区を設定して調査を実施した。調査は赤ホヤ層上の黒色土層上面までを重機により除去する方法をとったが、東壁断面において赤ホヤ層下面までの擾乱が見られたため、一部境界いっぱいまで拡張した。以下は精査しながら掘り下げることにした。その結果、縄文時代中期の住居跡・土坑やそれに伴う土器・石器などが出土し、また赤ホヤ堆積以前の層においても早期の遺物が出土した。

第2節 遺構と遺物

A区において後期の住居跡を4棟とこれにともなうピット、土坑を4基の他、用途不明の遺構を3基検出した。またA区トレーニング内において焼石の点在を確認したが、集石等のまとまった遺構は検出されなかった。

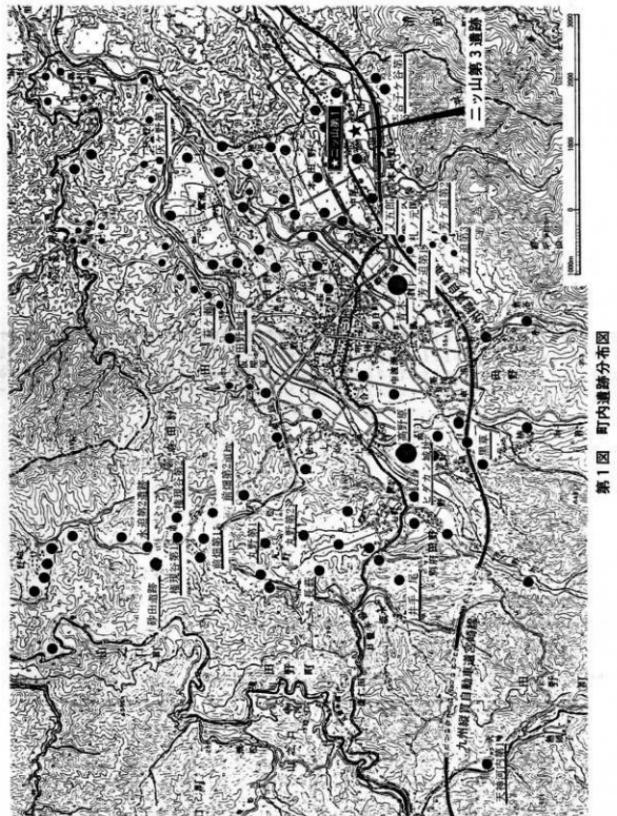
(S B-0 1)

輪長約460cmのやや不整形な円形もしくは梢円形に近いプランが想定される。深さは掘り込み面から最深部で約40cmを測り、赤ホヤ層の下部から黒褐色土層直上を床面とする。これに伴う柱穴等は確認されなかった。埋土内からは土器片が68点、黑曜石等の剝片が3点、磨石が1点(70)出土した。

(1~7)は上層、(8~12)は床面近くからの出土した。(5)はごく浅い縄文、(3)は撚糸文、(1・2・4・7~12)は条痕文を施す。(5・3)の内面はいずれもナデにより仕上げる。(6)は棒状工具による刺突文が見られる。(8)は口唇部に棒状工具による刺突文とその直下に2条の沈線を描き、以下に条痕を施す。内面は条痕の後、ナデにより仕上げる。(11)は内湾する口縁部で横側の条痕を施し、内面は荒い条痕により仕上げる。(12)はごく浅い条痕を施し、口縁部直下に粗雑な貼付突帯を横側に施す。内面は浅い条痕の後、ナデにより仕上げる。

(S B-0 2)

輪長約460cmのやや不整形な円形もしくは梢円形に近いプランが想定される。深さは検出面から最深部で約38cmを測り赤ホヤ層最下部から黒褐色土層直上を床面とする。建物の



構造は明確ではないがこれに伴う柱穴（S P 10~14）が検出された。埋土内から土器片が129点、剝片が6点（68）、石錐が1点（66）、磨石が2点、石皿が1点（74）出土した。

(13~25) は上層、(26~27) は床面直上からの出土である。(13~25~27) は撲糸文、(14~16~18~21~26) は条痕文を施す。(13~25~27) の内面は、いずれもナデにより仕上げる。(15) は貼付突帯をやや斜位に施すもので、内面は浅い条痕により仕上げる。

(16) は口縁部の細片で、条痕を文様としてヘラ状工具による条線を横位にめぐらせ更に縦位に施すもので、内面は条痕により仕上げる。(19) はやや上げ底に仕上げる底部で、文様は観察できないが、底面に僅かな条痕が見られる。(20) は棒状工具による刺突文を施すもので、内面はナデにより仕上げる。(22) は口縁部が内湾し波状を呈するもので、口縁部直下に基本的に2条の沈線を描き、以下に条痕を施す。内面はナデにより仕上げる。

(24) は沈線を横位とややシャープな波状に施す口縁部で、内面はナデにより仕上げる。

(14~17~18~21~26) の内面はいずれも条痕により仕上げる。以上その他、細片であるため図化しなかったが、外外面に条痕を施す滑石を含むものが2点出土している。いずれも薄手である。

(68) は縦長剝片で片側に一部加工痕が見られる。

〔S B-0 3〕

(南北——) ×東西340cmの方形プランの西壁に台形の190cm×125cmの張り出し部が付く。深さは検出面から約35cmを測り赤ホヤ層最下部を床面とする。主柱穴は明確ではないがS P 15~20はこれに伴うものと考えられる。埋土内から土器片が16点、チャートのチップが1点、石皿（79）が出土したが、ピット内からの出土は無かった。

(28) はごく浅い条痕を施し、内面は条痕により仕上げる。この他、撲糸文を施すものも出土している。

〔S K-0 4〕

150cm×90cmの精円に近いプランを呈し、検出面からの深さはきわめて浅い。埋土内からは土器片が33点、石錐が1点、チャートの剝片が1点出土した。

(29) は連続刺突文が見られる。(30) は内湾する口縁部で、ヘラ状工具による2条の沈線を波状にめぐらす。内面は条痕のちナデにより仕上げる。(31) は条痕を施すもので、内面は条痕により仕上げる。(32) は内湾する口縁部付近の破片とみられる。貼付突帯にヘラ状工具による押圧刻み目を施し、内面はナデにより仕上げる。(33) は撲糸文を施すもので、内面はナデにより仕上げる。(34) は内湾する口縁部で、その直下に2条の沈線を横位にめぐらせ、間に斜位の沈線を連続させて文様帶をつくり、更に下部に1条の沈線

を波状にめぐらす。内面はナデにより仕上げる。

〔S K-0 5〕

145cm×120cmの精円形に近いプランを呈し、検出面からの深さはきわめて浅い。埋土内からは土器片が13点出土した。

(35) は縦位の平行する細い沈線を施す。(36) は条痕を施し、内面を条痕により仕上げる。

〔S X-0 6〕

525cm×——の不整形なプランを呈し、深さは検出面から約15cmを測る。底面から円形のピット（S P 15~20）を検出しており、住居跡の可能性も考えられる。埋土内から土器片が11点出土した。

(37) は斜位の細い沈線が見られる。(38) は条痕を施し、内面を条痕により仕上げる。

(39) はやや上げ底を呈する底部で、文様等は観察できない。

〔S K-0 7〕

92cm×83cmの円形でやや袋状を呈し、深さは検出面から69cmを測る。埋土内から土器片が5点、黒曜石の剝片が1点出土した。

(40) は条痕を施すもので、内面は条痕により仕上げる。

〔S X-0 8〕

S X-01と02の中間に位置し、幅（最大）約208cm、深さ23cmを測る。埋土内から土器片が35点、剝片が2点（うち姫島産黒曜石が1点）、敲石が1点、磨石が1点（69）出土した。S B-02・03と同時期の埋没を想定した場合、02と03を画するもの、もしくはこれらに伴う溝などが考えられる。

(41) は条痕を施すもので、内面は条痕により仕上げる。(42) は内湾する口縁部で、棒状工具による刺突文を施し、ヘラ状工具による刻み目貼付突帯を波状にめぐらすものとみられる。内面はナデにより仕上げる。(43) は撲糸文を施すもので、内面はナデにより仕上げる。

(46) の石材は尾鈴山麓産酸性岩類である。

〔S X-0 9〕

S X-08埋没後に掘り込む。深さ32cmを測る。ごく一部分を検出したもので形状・用途は不明であるが円形もしくは隅丸方形のプランが想定され、住居跡の可能性も考えられる。埋土内から土器片が22点、磨石が1点出土した。

(44~46) はいずれも条痕を施すもので、内面は条痕により仕上げる。(44) は内湾す

る口縁部である。

(SK-2-1)

58cm×27cmの不整形な長方形を呈し、検出面からの深さは14.3cmを測る。遺物の出土は無かった。

(包含層の出土遺物) (47~57・64・65・67・75~78・80・81)

(47・55・56) は条痕、(51) は繩文、(52) は撚糸文を施す。(51・52) の内面はいずれもナデにより仕上げる。(48) は内湾する口縁部で、条痕を地文としてヘラ状工具による押引き状の深い沈線を施す。内面はナデにより仕上げる。胎土に滑石を含む。(49) は内湾する口縁部で、直下にヘラ状工具による横位の連続刺突文を2条めぐらせ、その下部はヘラ状工具による斜位の平行する沈線をめぐらす。(50) は内湾する口縁部とみられ、端部に棒状工具による押正刻み目、その下部に同原体による浅い刺突文を施し、やや粗雑な貼付け突帯を斜位(波状?)にめぐらす。内面は条痕により仕上げる。(53) は貼付け突帯が複数回に見られる。内面は条痕により仕上げる。(54) は弱く内湾する口縁部で、端部に横位の貼付け突帯をめぐらせ、さらにその下部に貼付け突帯を波状にめぐらす。内面は条痕により仕上げる。(55) は上げ底を呈する底部で、内外面・底面に条痕を施す。底径は反転復原で5.8cmを計る。胎土に滑石を含む。

(67) は頁岩の石核で、一部自然面を残す。(65) は石錐で片側を欠損する。(64) は硬質の砂岩の敲石である。(75~78・80・81) は石皿で、熱を受けた痕跡が見られるものもある。

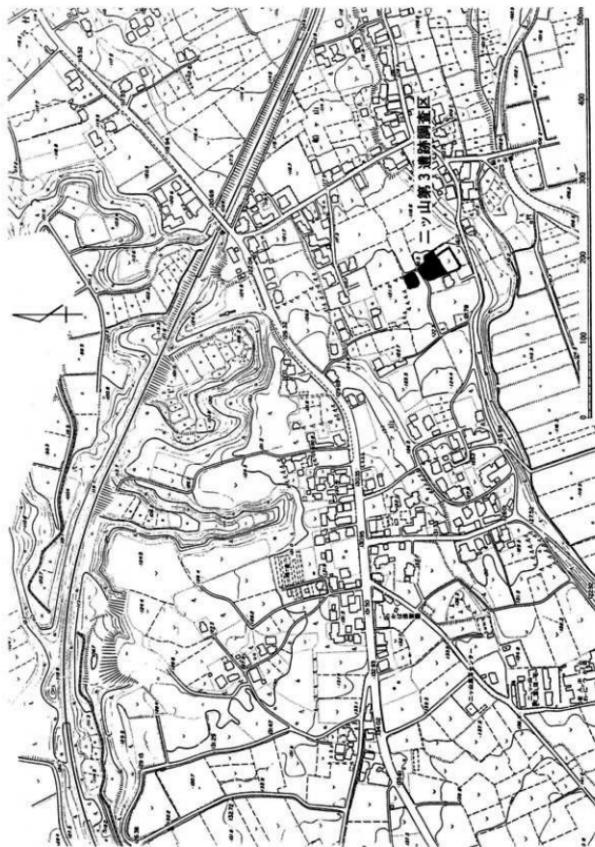
(確認トレンチの出土遺物) (58~63)

(58~62) は横位の条痕文を施すもので、(63) のみ斜位の条痕文を施す。いずれも内面は条痕により仕上げる。(60・61) は口縁部で、残存高は(60) が3.8cm、(61) が4.4cmを計る。これらは全て暗褐色(7.5Y R3/4)土層より出土した。

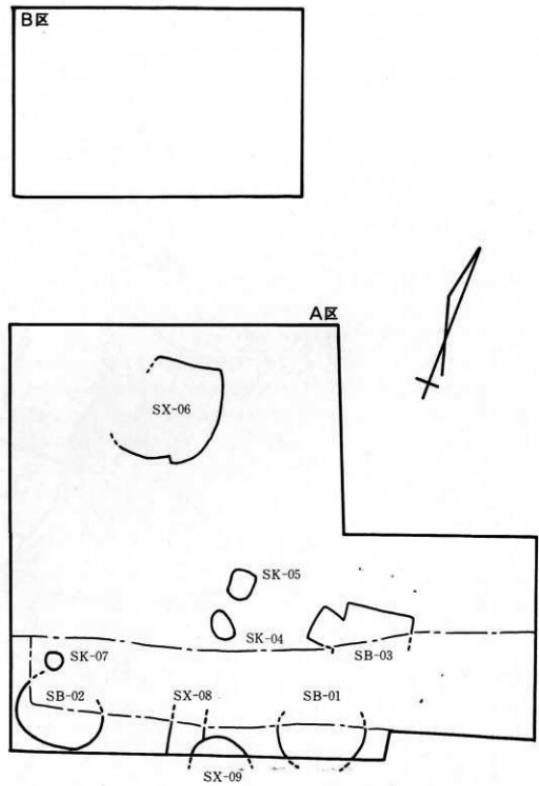
〔参考文献〕

「天神河内第1遺跡」 1991 宮崎県教育委員会

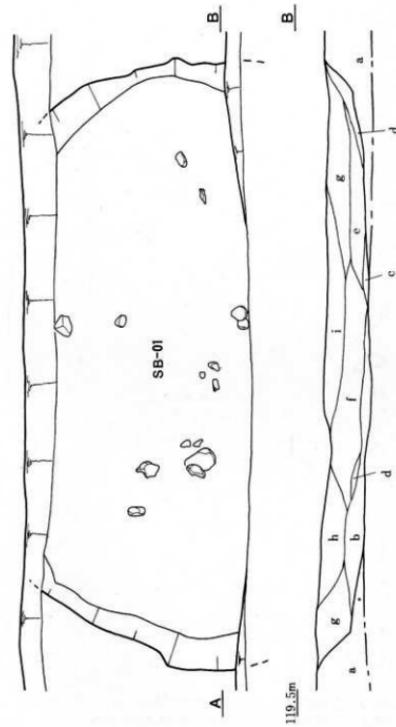
東 和幸「鹿児島県における繩文中期の様相」『南九州繩文通信』NO.5 1991
南九州繩文研究会



第2図 濱崎周辺地形図

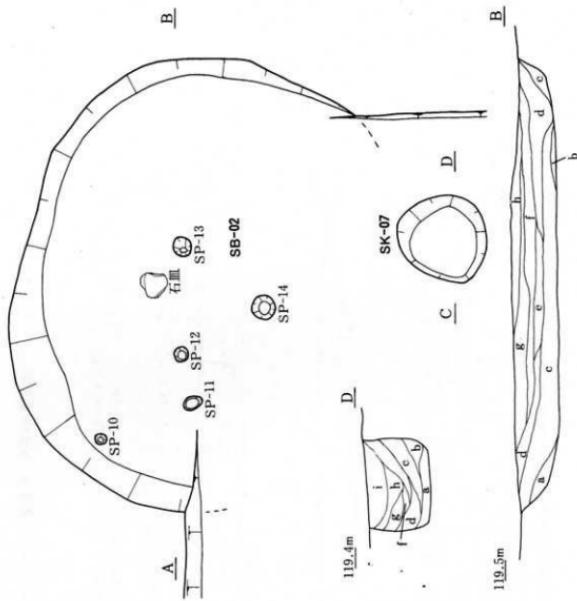


- 8 -



第4図 SB-01実測図 S-1/30

- 9 -



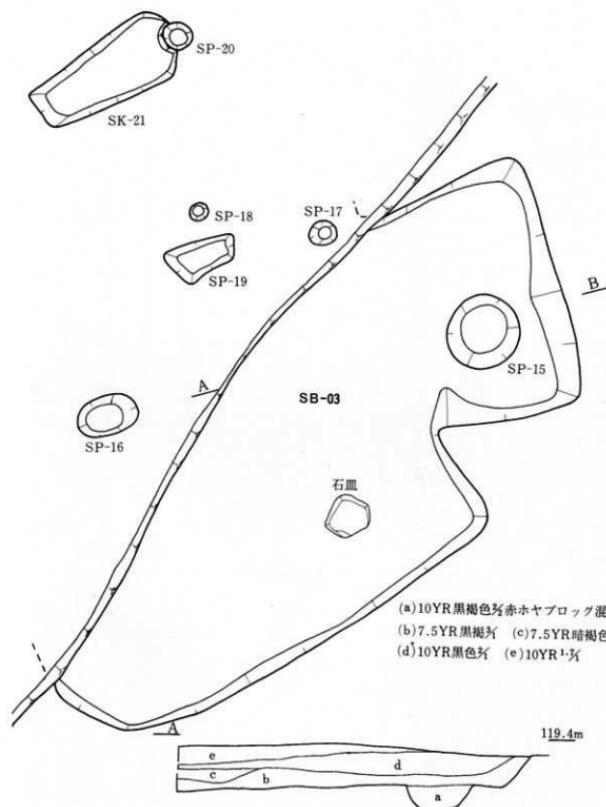
SB-02

(a) 10YR 灰黃褐色^{1/2}赤ホヤ粒混 (b) 7.5YR 暗褐色^{1/2} (c) 7.5YR 黑褐色^{1/2}
 (d) 10YR 黑褐色^{1/2}赤ホヤ粒混 (e) 7.5YR 黑褐色^{1/2} (f) 10YR 黑色^{1/2}
 (g) 10YR 黑褐色^{1/2} (h) 7.5YR 黑色^{1/2}

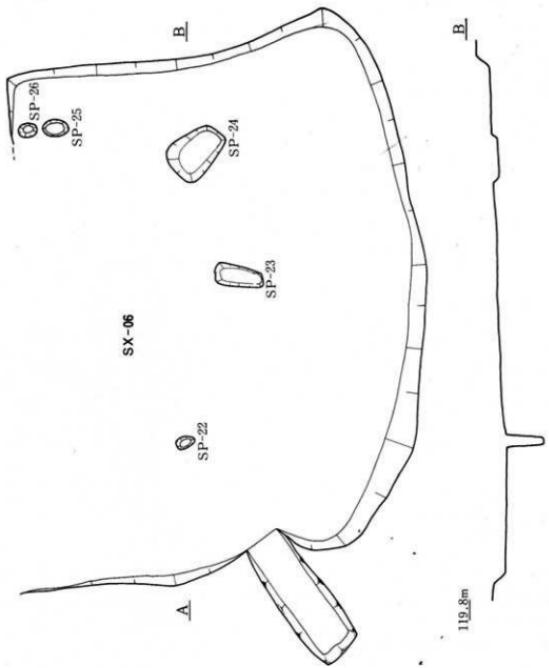
SK-07

(a) 7.5YR 暗褐色^{1/2} (b) 10YR 暗褐色^{1/2} (c) 7.5YR 極暗褐色^{1/2} (d) 7.5YR 褐色^{1/2}
 (e) 7.5YR 黑褐色^{1/2} (f) 7.5YR 暗褐色^{1/2} (g) 10YR 黑褐色^{1/2}赤ホヤ粒混
 (h) 10YR 黑色^{1/2} (i) 10YR 黑色^{1/2}赤ホヤ大粒ブロック混

第5図 SB-02・SK-07実測図 S-1/40

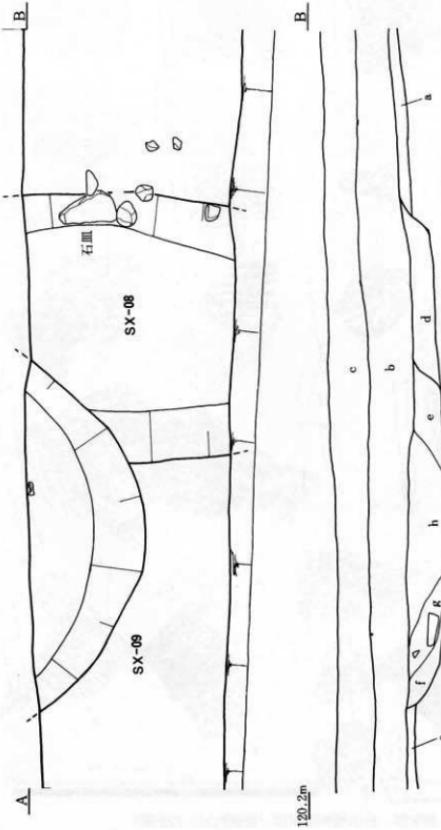


第6図 SB-03実測図 S-1/30



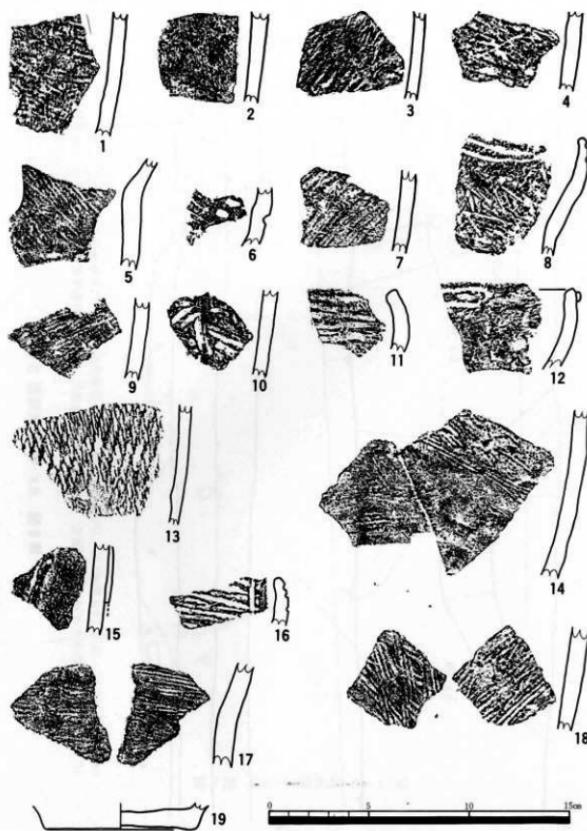
第7図 SX-06実測図 S=1/40

-12-



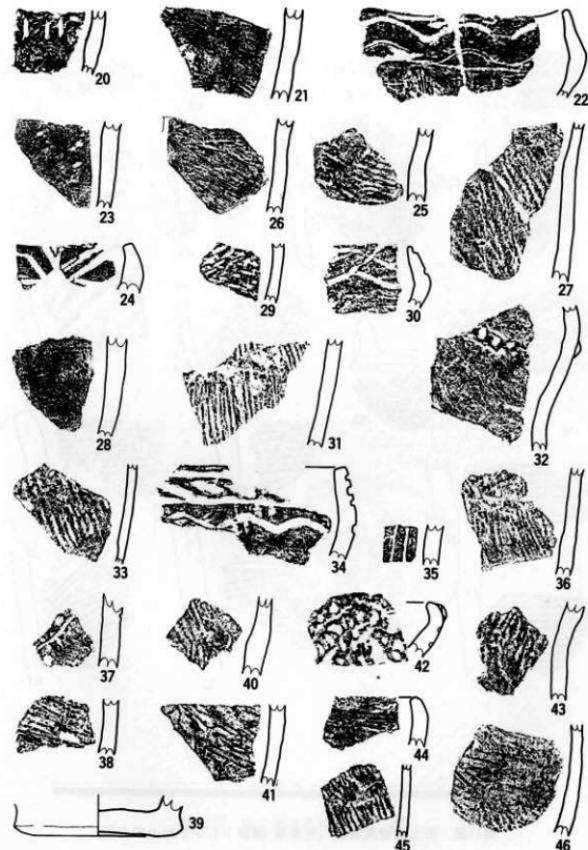
-13-

第8図 SX-08-09実測図 S=1/30



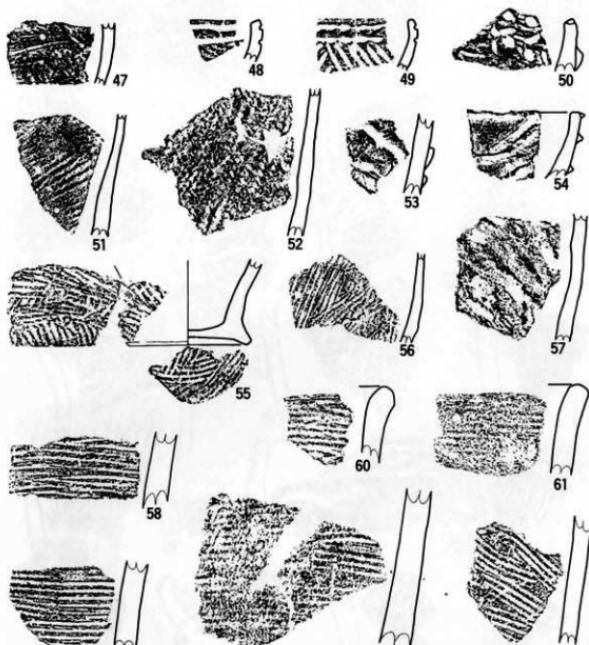
第9図 出土遺物実測図（遺構内出土の土器）

-14-



第10図 出土遺物実測図（遺構内出土の土器）

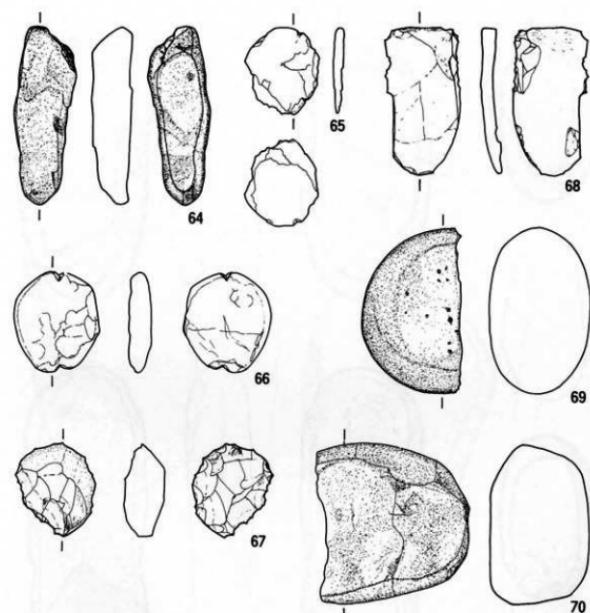
-15-



0 1 10 15cm

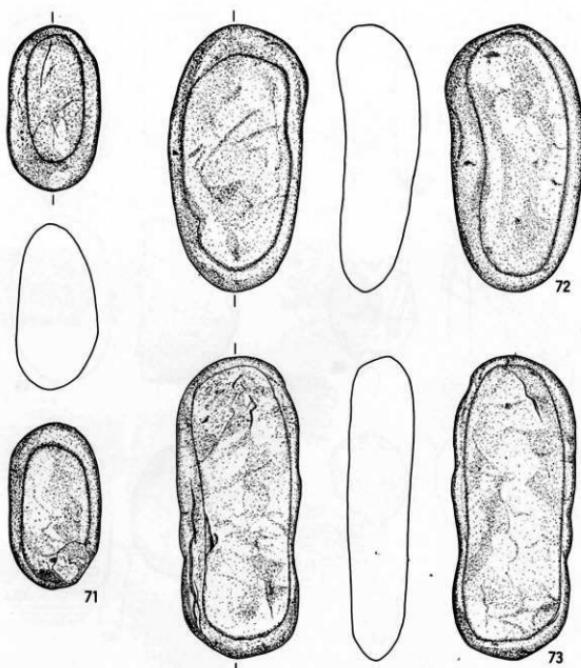
第11図 出土遺物実測図（包含層・確認トレンチ出土の土器）

-16-



第12図 出土遺物実測図（石器）

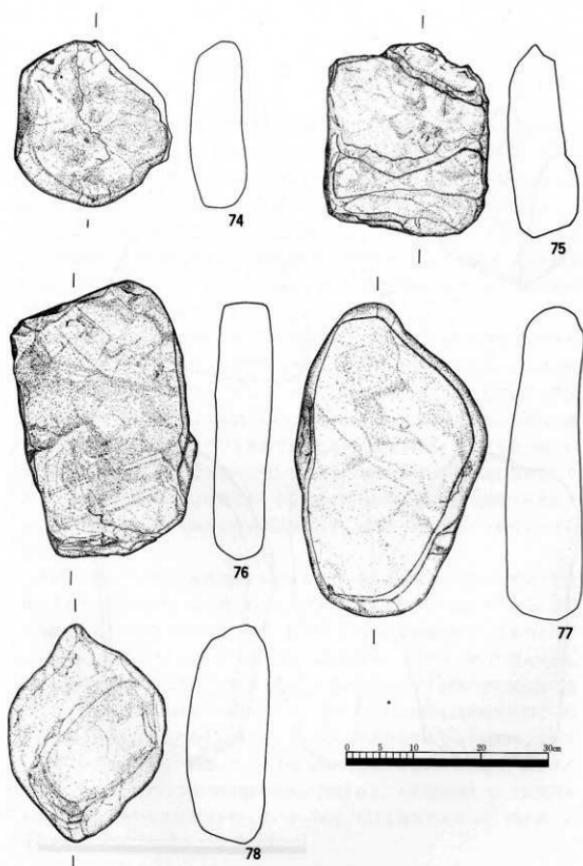
-17-



0 5 10 15cm

第13図 出土遺物実測図(石器)

-18-



第14図 出土遺物実測図(石器)

-19-

第III章 まとめ

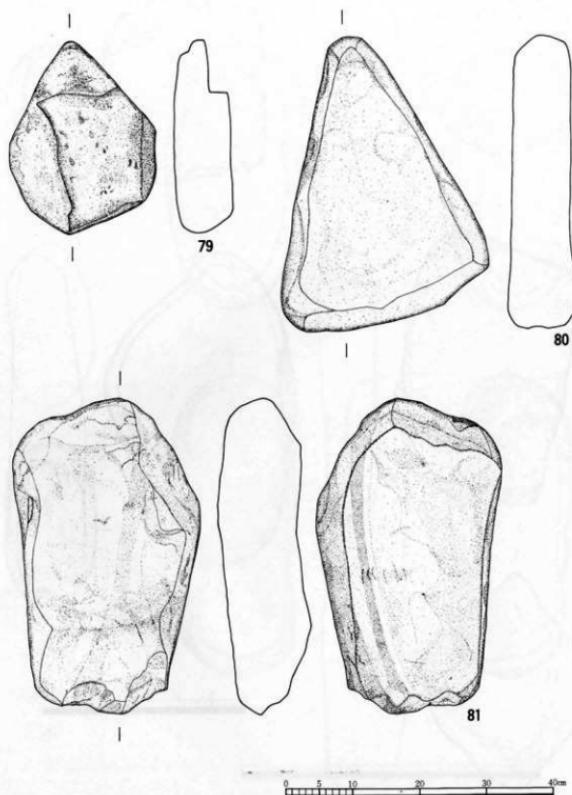
調査の結果、縄文時代早期の遺物包含層と焼石の分布、中期の遺物包含層と住居跡や土坑などの遺構群を確認し、二ツ山第3遺跡はこの時代の集落址であることがわかった。

町内における縄文時代中期の調査例は「天神河内第1遺跡」があるが、小規模ながら遺構を確認したのは、今回が初めてである。

早期については、明確な集石遺構の検出は無かったが、全面を調査すればそうとうの拡がりが見られたものと想定されるが、調査期間等の制限もあり、ごく一部のトレンチ調査に留まらざるをえなかった。尚、近隣に所在する二ツ山第1遺跡においては、早期の集石遺構が密集した状況で検出されている。

中期の遺構は住居跡と判断しうるもの3軒のほか、土坑等が7基検出されたが、調査区の境界にあたっていたり擾乱を受けていたりと条件が悪く、特に住居跡についてはその規模等を明確にすることはできなかった。個々の分布はSX-06を北限としており、B区では見られず、A区の中央より南側にむけて集約されている状況を確認した。おそらく南方の台地先端と、その東西にのびる集落であったものと想定される。また、SB-01・02が円形（もしくは橢円形）であるのに対して、SB-03は方形でしかも張出し部を有しており、隣接するSB-01とは時期を異にするものとみられる。SB-02に隣接するSK-07は出土遺物等からみても頗著な時期差はみられず、02に伴うものである可能性が考えられる。

中期の土器については、条文を主体とするもの、縄文を主体とするものと撲糸文を主体とするものに大別され、春日式・船元式・里木式が混在する。口縁部はその度合に若干の差異があるものの全て内湾するもので、波状につくるものと直線的につくるものがある。胎土については、とくに(48・55)のほか細片を含めた8点のみに滑石の混入がみられた。滑石を含むものは町内の資料で見る限り早期には存在せず、前期の曾畠式以降に出現する。おそらくこれらは輸入品とみられる。(69)の石材は尾崎山麓産酸性岩類で、町内の早期においては多数の出土を見るものであるが、その分布のみならず時期的な広がりも興味深いところである。石皿については住居跡からの出土を含めて8点あり、調査区の規模から考えて、区外に多数の住居跡の存在が予察される。その他詳細については類例資料調査等による充分な比較検討を行っていない段階における報告であるので、機を得て再度報告したい。



第15図 出土遺物実測図（石 器）

【参考文献】

「天神河内第1遺跡」 1991 宮崎県教育委員会

東 和幸「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』NO.5 1991

南九州縄文研究会

「田野町内遺跡詳細分布調査報告書」田野町文化財調査報告書 第10集

田野町教育委員会 1990

「二ッ山第1遺跡」田野町文化財調査報告書 第13集 田野町教育委員会 1992

写 真 図 版

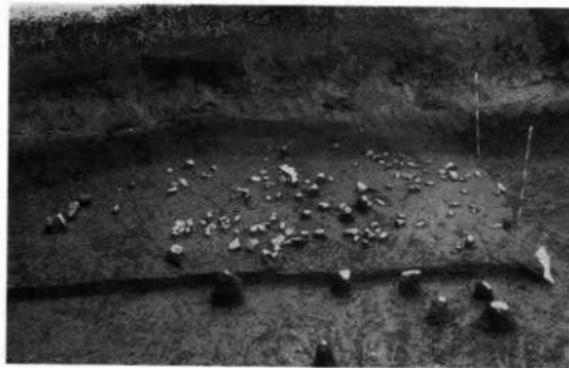
(二ッ山第3遺跡)



A区全 景



A区確認トレンチ



焼 磚 等 (早期)
出 土 状 況

PL-2



遺構検出状況



SB-01

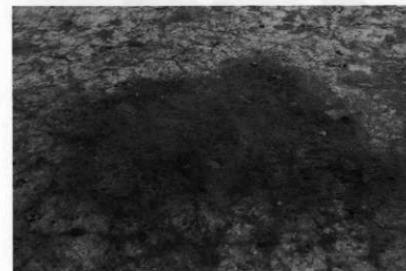


SB-02 (奥)
SK-07 (手前)

PL-3



SB-03

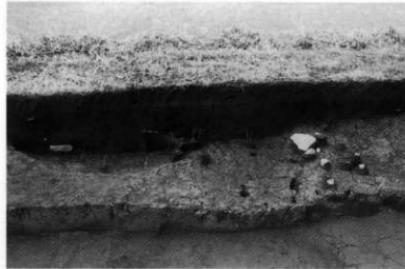


SK-05 (精査前)



SX-06

PL-4



SX-08 (右)
SX-09 (左)

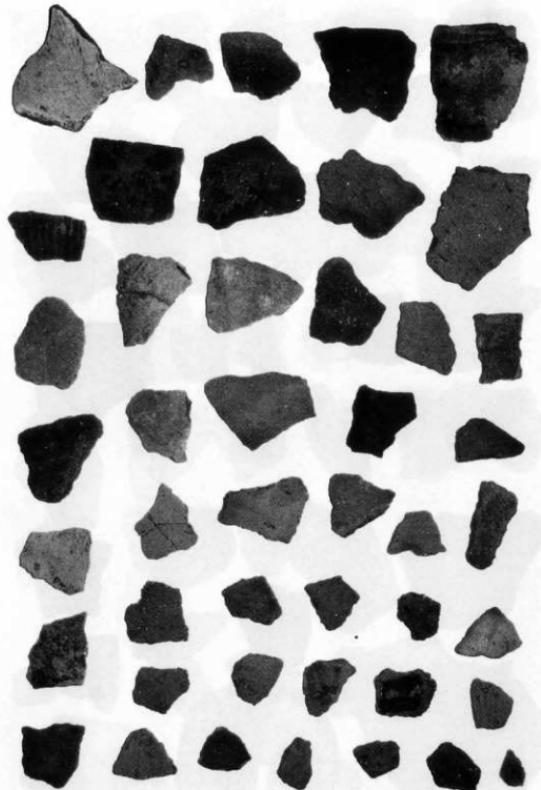


B区全景



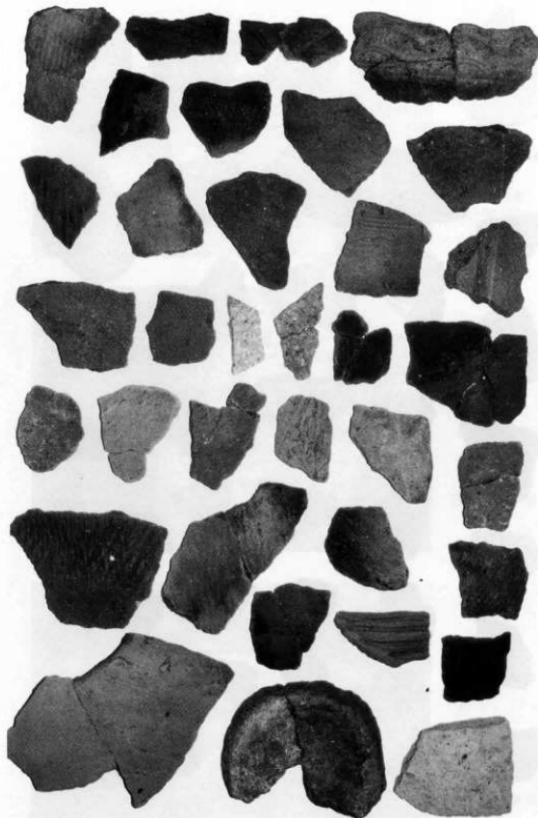
A区作業風景

PL-5



(SB-01)

PL-6



(SB-02)

PL-7



(SB-03)



(SK-04)



(SK-05)

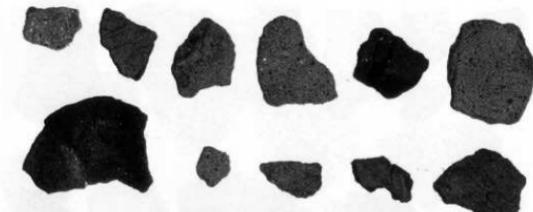


(SK-06)



(SK-07)

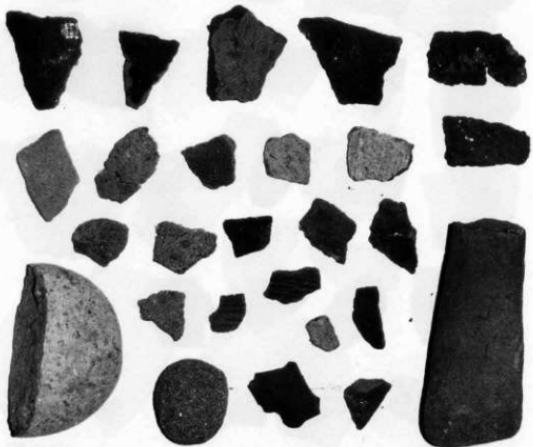
PL-8



(SX-06)

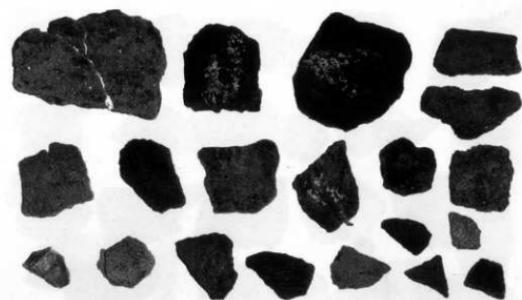


(SK-07)

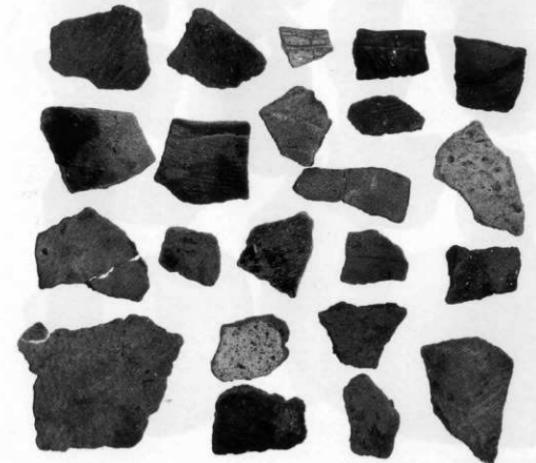


(SX-08)

PL-9

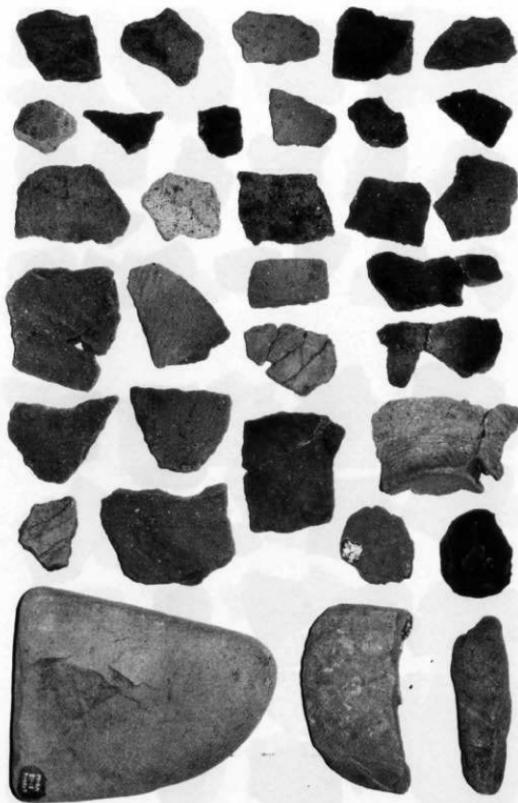


(SX-09)



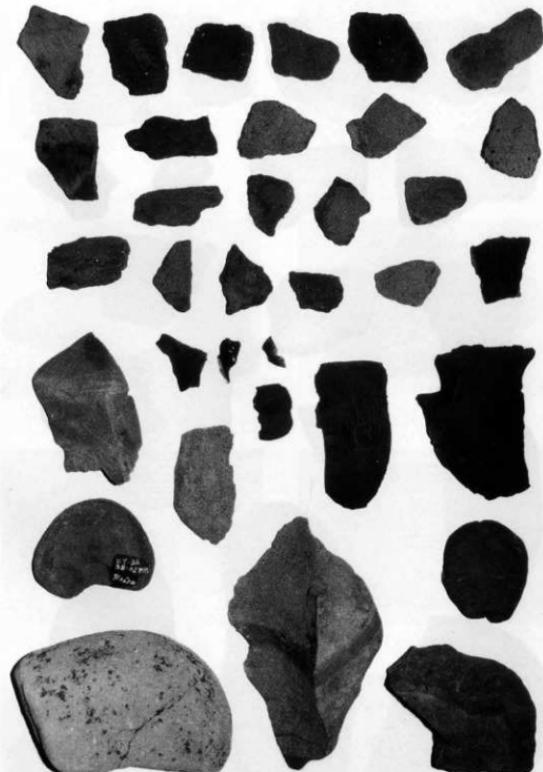
(中期の包含層)

PL-10



(中期の包含層)

PL-11



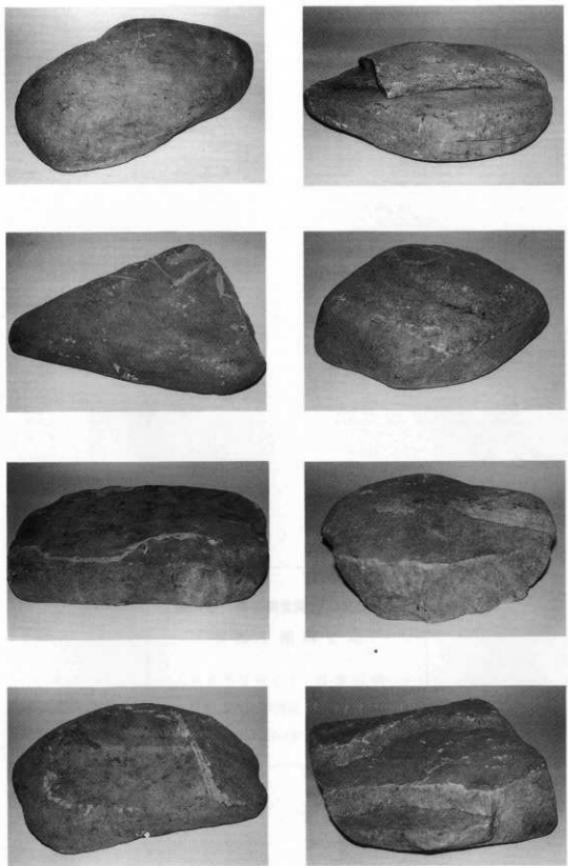
(中期の包含層)

PL-12



(A区確認トレンチ)

PL-13



田野町文化財調査報告書 第15集
ニッ山第3遺跡

発行年月 1992年3月

編集・発行 田野町教育委員会

印 刷 前印刷センタークロダ

